二俣川小だより

冬休み号

横浜市立二俣川小学校　平成27年12月25日
発行責任者　校 長　野田 こずえ

冬休みを迎えて

野田　こずえ

学校のイチョウは何故か毎年色づくのが遅く、今年も、やっと鮮やかな黄金色に染まったと思ったら、もう新しい年がすぐそこまで来ています。校舎本館裏のモミジが色づいたのも12月の声を聞いてからでした。緑から黄色を経て燃えるような朱色に変身するグラデーションは、陽の光を受けると、透き通るように、降るように輝き、階段を昇る足を止めるのが日課のようになっていました。

12月5日（土）の二小チャレンジには、たくさんの保護者・地域の皆様にご来校いただき、ありがとうございました。勧誘や呼び込みはしない約束になっていましたが、「見て欲しい」「聞いて欲しい」という思いは溢れんばかりでした。準備するのは楽しいばかりではなく、資料作りに四苦八苦する姿も見られましたし、保護者の方の励ましやご助力も大きかったと聞いています。しかし、当日は、子どもたちと一緒にゲームを楽しんでくださる姿、少し緊張した面持ちの発表に耳を傾けてくださる姿、我が子だけでなく温かい声をかけてくださる姿が、子どもたちのやる気を高め達成感にもつながったのを感じました。学校だより10月号に、誰かにほめられたり認められたりすることで自尊感情をもてるようになること、そんな自尊感情の素を「ビタミンJ」と呼ぶことを書きましたが、二小チャレンジは、まさに、子どもたちに「ビタミン J」をたっぷりと補給する行事となりました。感謝の気持ちを込めて、二俣川小だより冬休み号を「チャレンジ特集」として発行させていただきます。是非、ご家族でお子様と一緒にご覧ください。

さて、今年の世相を表す漢字に「安」が選ばれました。安倍政権による安全保障関連法案の審議が大きな話題となったこと、テロ事件や異常気象などで人々が不安な気持ちになったことなどが選ばれた要因だそうです。神奈川新聞のコラム「照明灯」に「本来の『やすらか』の意からは程遠い世相だった証だろう」と評されていたのも頷けます。子どもたちにとっての学校は、安心できる場所だったでしょうか。人権週間を迎えるにあたって、朝会で「いじめはしないことだけでなく、させないこと、見逃さないことが大切です。いじめる人も　いじめられる人もいない　安心な二俣川小学校にしましょう。」と話しました。各学級でも話題にしてもらいました。いじめはいけないということは誰もが知っています。しかし、改めて振り返ると「あんなことをされたら、いやな気がするかもしれないな。」と思うことを見逃してしまったり、なんとなくいっしょに行動してしまったり（12 月号に書いた「同調」です）することはあるようです。いじめの「芽」は、どこにでもあるということです。改めて振り返らなくても、やらない方がいいことはやらない強さをもってほしいし、「傍観者」となることでいじめを容認したりいじめに加担したりするような子にはなってほしくありません。例年行っている「いじめ解決のための生活アンケート」に併せて、そのあたりの意識調査もしているところです。子どもたちが「安」本来の意味通りに安らぎ、安心して自分らしくいられ、互いの良さを認め合える学校をめざして、具体的な取り組みを検討してまいります。

明日からは冬休み、子どもたちには、年末・年始のそれぞれの家庭や地方・地域ならではの風習、この時ならではの食べ物を満喫し、新年には元気な笑顔で学校に戻ってほしいと願っています。

最後になりましたが、本年の、本校教育活動へのご理解・ご協力に心より感謝申し上げます。どうぞ、良いお年をお迎えくださいませ。

１２月の教育活動

チャレンジ特集

笑顔いっぱい友達いっぱい

生活科やチャレンジ（総合的学習の時間）で学んだことを発表し合う二小チャレンジを１２月５日(土)に開催しました。わかりやすく伝えるために掲示物を作ったりクイズを取り入れたり体験コーナーを作ったりと、様々な工夫をしました。「こんにちは。」「見てくださってありがとうございました。」元気な声が響き、子どもたち、保護者、地域の方の笑顔が溢れました。

５組　１０月に旭区の友達と行った合同宿泊学習について、３つのグループに分かれて発表しました。はっきりした声で話すことをめあてにして、何度も練習を繰り返すことで原稿を覚えました。当日は、しっかり前を向いて発表することができました。

実行委員長を中心にチャレンジ実行委員が、「チャレンジのはながさく」をスローガンに掲げ、思い出に残る一日にしようと準備を重ねました。各学年の代表児童も思いを込めて話すことができました。

１年生　「しぜんとあそぼう」をテーマに、「あさがおいち」と「きのみやさん」を開きました。「あさがおいち」では、春から育てたあさがおのたたき染めを飾り、自然の恵みへの感謝を群読で表現しました。「きのみやさん」では、自分達で木の実を使って作ったおもちゃや楽器、飾りを紹介しました。お客さんに声をかけるのはドキドキしましたが、一緒に遊んだり紹介したりできたことを喜びました。一生懸命作った作品に対して、「すてきだね。」「がんばったね。」と声をかけてもらい、達成感を味わうことができました。

２年生　ペットボトルや紙コップ、段ボールや空き箱を使っておもちゃを作り、来てくれた人と楽しく遊びました。捨てられてごみになってしまうような材料を生かして動くおもちゃを作ったり、作ったもので楽しく遊べるようなゲームのルールを考えたりしました。得点を競ったりおもちゃを一緒に作ったりそれぞれのグループごとに工夫した内容に取り組みました。

また、国語科の学習との関連で、おもちゃの作り方を書いた説明書を全員が発表しました。聞いている人によく伝わるように、声の大きさを考えたり実物を見せたりしながら話しました。大勢の人の前で話すのはちょっぴりドキドキしたけれど、とても良い経験になりました。

3年生　「大根・だいこん・ダイコン！」

２年生でも育てた大根ですが、今回はいろいろな種類の栽培に挑戦しようと１０種類の大根を育てました。実が丸くて大きい聖護院大根、白ではなく赤い大根、たくわん用の細長い大根など、種の色や形、大きさからして違うのですが、出てきた芽や葉などから色や形などの違いをたくさん発見していきました。自分の目で見つけたこと、資料から調べたことなど、グループごとに追究してきたことを生き生きと伝えました。チャレンジをはじめとする「総合的な学習の時間」では体験的な活動の機会を通して多くの発見をし、自ら学びをつくり出していく過程を大切にしていきたいと考えています。

4年生　「福祉について」の学習で、「障害をもつ人とよりよく関わり合うにはどうしたらよいのか」ということを学年のテーマにして各クラスが取り組みました。見に来て下さった方に発表をほめられたり、アドバイスをもらったりしながら調べたことや考えたことを一生懸命伝える姿が見られました。学習を通して、相手の立場に立って考え、行動することの大切さを体験的に学ぶことができました。

5年生

５年生は、１組は「二小環境チャレンジ」、２組は「地産地消から自産自消…野菜研究室」、３組は「お米博士になろう」と、各クラスでテーマを設定して学習を進めてきました。チャレンジ当日は、見に来てくださった方に分かりやすく伝えるにはどうしたらよいかを考えながら発表することを意識しました。

発表を通して、自分たちにできることや、もっと調べてみたいことがはっきりとしてきました。１月以降も引き続き学習を深めていきます。

☆　二小チャレンジ以外の教育活動については、１月号に掲載させていただきます。

☆　新年の登校初日は、１月７日（木）です。持ち物等は、各学年だより１２月号をご覧ください。

6年生　職業についての学習を進めてきました。出前授業でゲームクリエイターやシステムエンジニアなどの仕事内容や実際の話を聞いたり、自分の興味のある職業について調べたりしてきました。二小チャレンジでは学習したことをもとに発表しました。パソコンを活用して発表したり、討論形式で交流したり工夫することができました。

職業について調べたり発表したりする中で、自分の将来について考える機会が増えました。また、働くことは大変だけど、やりがいもあるということを学びました。

エピローグ　新野ＰＴＡ会長は、すべて教室を見てくださったそうで、多くの児童に声をかけてくださいました。エピローグは高学年中心で、発表の成果をよくまとめ、二小チャレンジをしっかりと締めくくることができていました。

学校運営協議会より

「学年が上がるごとにまとめ方、発表の仕方が身についていて、６年生の討論は画期的だった。」「自分の言葉で発表をしている姿を見て心が温かくなった。」「子どもと保護者が一緒に楽しんでいる様子がよかった。」「案内図や廊下の掲示で、何を発表するのかわかるとよかった。」「エピローグの話も、よくまとまっていてとても上手だった。」など、たくさんのお褒めの言葉をいただきました。

児童支援専任より

二小チャレンジでは、子どもたちが生活科や総合的な学習の時間での学習の成果をご覧いただけたと思います。保護者・地域の方々、他学年の児童に発表するために、どの学年・学級も発表に工夫を加えていました。本番に向けて準備に取り組む子どもたちの顔はとても生き生きしていました。

相手に何かを伝えるときには「相手意識」をもつことが大切だと指導しています。相手に応じて表現方法や内容を考えることで、より伝わりやすくなるとともに、相手にとってもわかりやすいものになります。発信する立場からの一方通行ではなく、受け手側のことを考える一種の思いやりとも言えます。

今回のチャレンジで子どもたちは、「どうやったらわかってもらえるのだろう」「どうしたら楽しんでもらえるんだろう」など、受け手側のことを考えた活動をしていました。それは、学習発表だけでなく、日常生活でも必要な感覚です。自分の言葉がどのように伝わり、相手がどんな思いをもつのかを考えられるようになってほしいと思います。

私たちは人と関わりながら生きています。子どもたちもこの先多くの人と関わりながら生きていくことになるでしょう。よりよい人間関係を構築するためには「相手意識」は必須です。日常のやり取りから少しずつ取り組み、育てていきたいものです。

児童支援専任　　伊勢谷　裕教